

放送人の会

NO・22

2005・1・21発行

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

Tel&fax 03-3221-0019 Email info@hosojin.com

代表幹事 大山勝美 編集担当 伊藤雅浩、松尾羊一

五超の会へ

大山勝美

明けましておめでとございます。
 ことは酉年。おんどりがとき声をあげようとするとき、羽根を大きくはげしく打ち振ります。

昨年後半の当会の催しは、飛躍する酉年の助走のような盛り上がりを見せたのでした。名作の舞台裏の「君の瞳をタイホする」(二月)「氷点」(十月)「蔵」(十二月)。いずれも横浜情文ホールへの一般の申し込みは、定員の4〜5倍の人氣で、終つての参加者の顔は満足げで晴れやかでした。

「人氣番組メモリー」の「欽ちゃんのドンとやってみよう」(十一月)も欽ちゃんのコメディアンの現役ぶりが十分に発揮され、会場は笑いと拍手の連続でした。参加者の一人が「これはテレビ番組のプロジェクトXだ。NHKとかけあって、ぜひ番組にすべきだ」と発言したほどです。

たしかに、このところ内容が濃く面白く、二百名ほどの観衆相手だけというのは、まことに勿体ないと関係者は口惜しがっていました。

十一月恒例の幕張でのインタビュービームでのシンポジウムもそうです。今回は「戦争の記憶と報道」という堅めのテ

ーマ。NHKの五十嵐公利、アジアブレスの野中章弘、写真家の本橋成一、司会は今野勉という実力派の論客。参加者が集まるかと心配したのですが、逆に例年より多く集まりました。

この内容もすぐれもの。「東京で同じメンバード、同じことをやれば客は喜ぶ」と、私は思わず口走ったほどです。「会の折角の催しが、限られた参加者で一回こっきりでなく、その内容も開かれたもつと大勢の人たちの目にふれさせられないものか」いつも催しが終るたびに、湧き上がってくる思いでした。

久野・各務幹事を中心に行っている事業「放送人の証言」(オーラルヒストリーによる放送個人史)は、現在七十名近くを収録しておえましたが、そのうちジャンル別に九名の方を選んだ、TBS「新・調査情報」で第3号から3号続けて掲載してもらえることになりました。勿論御本人の了解を得てのことです。

これに勢を得て、現在「名作の舞台裏」「人氣番組メモリー」の公開シンポの記録をもとに、出版できないかと某出版社との下打ち合わせに入っています。ご存知のような出版状況です

から、簡単に進むとは思われませんが、すこし胸ときめかせています。
 昨年に始めた中沢幹事を中心にした「会員たちの懇談会」、横沢彪会員を迎えて話は放送全体に弾みました。今年「テレビの嘘を見破る」を著した今野勉幹事の予定。会員以外の参加を広く呼びかけてみたいと思つていま

「地域番組フォーラム」はどうなつた?という声がかきこえてきそうです。じつは、当会の委員会が考えたミニ番組コンテストとシンポジウムは、昨秋、放送文化基金の創立三〇周年記念行事と、時期、内容がまったく重なることと判つたのでした。

地域の番組担当者にも、同じ内容の集会のため声をかけるのは、酷というものです。その代わり、といつては図体がやや大きすぎるのですが、第五回日・韓・中制作者フォーラム・イン・東京の開催に力を貸すことにしました。

一昨年韓国(済州島)、昨年中国(揚州)に続いて、日本では初めてということになります。私自身一昨年から参加していますが、旧満州育ちですが朝鮮人学校の教師をしていたこともあり、人一倍中国、韓国に負い目と親しみを感じているのです。

中国、韓国に出かける機会もなく、

放送関係者の知人もまったくありません。十数年前までは「日本に学ぶ」「追いつき追い越せ」という姿勢でしたが、ここ四・五年飛躍的にテレビ番組の表現力がアップしてきました。ほとんど日本にひけをとらない。

一昨年、昨年の韓・中のスタッフは自信をもち胸をはっていました。一方、日本の制作現場は、視聴率競争と経費削減に追われて疲れきっています。上り調子の勢いのいい韓・中のスタッフや番組に接することは、日本側にとって何よりの刺激になり励まされるに違いないと確信しています。

さらには、このフォーラムを契機に日本のテレビ番組スタッフの当会への入会も期待できるのではないのでしょうか。

山田尚幹事を中心の準備委員会では、放送番組センター、ATP、放送批評家懇談会、などの共催で、NHK、民放連、総務省、外務省、文化庁の後援を得て、当会がコーディネートするパン・ジャンルの放送番組国際会議にと構想中です。

幹事会で「日・韓・中制作者フォーラムに取り組む意義」について話し合いが行われました。今野事業委員長が「当会は四超一世代、地域、ジャンル、組織をこえて活動することになっ

ているが、国境をこえて五超で活動すればいい」との発言があり、膝をうつし思いをしました。

古来四の数字もそうですが、五とい

05 「放送人グランプリ」

ノミネートをお願い

今年も「放送人グランプリ」ノミネートの季節となりました。

これまで、多くのノミネート投票が集まり、会が顕彰するにふさわしい人々を選ぶことができました。

手作りの簡素な贈賞式でしたが、受賞者の方々も喜ばれ、放送のありようを考える豊かな時間を毎年もつことができました。今年も4回目となります。

何といっても時代を見据えた的確な贈賞をすることが賞の個性を高めるために最も重要なことであることは変わりません。

そのために、会員各位の豊富な

う数字は「日本書紀」で五瀬命（いつせのみこと）など、きわめて縁起のいい数字だと言われています。

身丈にあった活動とよいながら、

経験と高い見識を生かしたノミネートが必要です。

ノミネートの要領は昨年と変わりません。

1、贈賞の対象は、主として04年4月から05年3月までの一年間で、テレビ・ラジオの企画・制作・演出、技術・美術などのスタッフ、編成、調査、研究、評論、など放送にかかわる活動のなかで最も顕著な仕事をしたと思われる人

2、候補者は、グランプリ候補1名（個人またはグループ）とその推薦理由。ほかに、贈賞したい人（またはグループ）の名前、理

羽ばたき大きくなることに首をすくめつつ、皆さん方の応分のご協力を心からお願い申し上げます。

由、適当と思われる賞のネーミング（特別賞、奨励賞、など自由に）2名程度お書きください。

3、締め切りは05年3月31日。放送人の会事務局へFAXまたは郵送あるいはメールでも結構です。

4、ノミネートすることができるのは、放送人の会員に限りますが、対象者は会員に限りません。出身母体やジャンルなどにこだわらず、広い視点でお考えください。

5、選考は、ノミネートの結果を土台にして、選考委員（川口幹夫委員長・5名）の討論で内定し、幹事会で承認という例年通りのプロセスで決まります。

今年度の選考委員のメンバーは1月29日の幹事会で決定される予定です。

2005 乙酉歳

会員年賀状拾遺

迎春

青木裕子

昨年は朗読の活動に力を入れた年でした。NHK弘前放送局が主催した朗読イベントは太宰治の「走れメロス」を、富山放送局の朗読会では高橋治さんの「風の盆恋歌」を朗読という素敵なチャンスをいただきました。今年も素晴らしい出会いを期待して良い作品に挑戦していきたいと思っています。

“国盗り物語”を観て

石井清司

テレビ東京10時間時代劇「国盗り物語」をビデオに録り観た。テレビ東久々の渾身、現代史観投影を予感し楽しんだ。群雄の戦国から安土桃山へ、決断に生きた若い雄将の生身身はどう見せるか。

実はC・A・Lの中尾、本間P、加地社長、松前企画協力の大事な事を丹念に知っておきたかった。中尾、本間両氏、水戸黄門で培った貯金を大いに生かしたと思う。役者をよく観た。光秀の渡辺篤郎、信長の伊藤英明は道三の

北大路の時代劇定番に引きづられたが、まずまず、伊武雅刀は秀逸だった。濃姫菊川伶の出来不出来の差の何とあること。酒井法子も成長したが高島礼子のお万阿はさすが。カタログのベルナル、テレ東を助けたがCMはヒドイ。本能寺直後こそ見どころ、時間切れが惜しかった。

大分より

市岡康子

農業県大分に住み、学生たちと農村を舞台にゼミを展開していますと、日本の農業や食のことを深く考えさせられ、予算の復活折衝で中山間地帯への補助金がつくとホッとするような心境です。ゼミ一期生が初めて作った作品を『案心院の力』と題して「地方の映像祭」に提出しました。もとより入選はしませんが、舞台となった松本集落が昨年の全国農業祭で「村づくり日本一」に輝き、天皇杯を受けたので、密着調査、撮影の場に選んだのは先見の明があつたかと、いささか報われた想いです。本年もよろしくお願ひ申し上げます。はるか大分より。

テレビ原人、05初夢

宇野 昭

年を跨いで燻り続ける海老沢NH

K、へ編集権を盾に生放送せずが一転、そのへ編集権で日曜のゴールデンを潰して、結果として謂い訳、居座り番組をやつてのける。二重の誤りを犯す傲慢さにも気付かぬ風に見える。オウムのTBSでもそうだったが、トツプたちの資質とそれを許容して来た組織の体質が問題。救いはいわゆる有事の際のへ基幹放送の体質の現状が透視出来たこと。この際海老沢体制で肥大化を続けたNHKの、せめて1チャンネル位は分割国営化して正体を明確にし、他は真の「民間放送」化に向けて体制体質を抜本的に改革するチャンスにすれば、そんな初夢を描いています。（もつともこの稿が出回るころにはどんな展開になつているやら）

2005年の映像

江口展之

おめでとうございます。この正月休みに今野勉さんの「テレビの嘘を見破る」を読み、思い出して「ブロード・キャスト・ニュース」(1987・20世紀FOX)のビデオを見ました。その後、スマトラ沖地震・津波被害援助のために、政府が決定した世界一多額(1・9現時点)の5億ドル見舞金について、そのことが地元の新報に載って「日系人としての誇りを持たた」

とのメールをブラジル在住の知人よりもらいました。日がたつにつれ増加する被災各地の生々しい津波を映したビデオ映像の放送が、従前になく政府の思い切つた決定を後押ししたのでしようか？これらの津波映像の増加は直接には映像機材の小型化の賜物でしょうが、ともあれ、映像の持つ影響力の功罪をもつと深く考えてみたいと思われた本、ビデオ、津波報道で幕開けした私の2005年です。

今年には著述業に専念します

大蔵雄之助

このところ活字づいています。去年は『一票の反対』(改訂増補版。麗澤大学出版会)と『ピンラディンのアメリカ核攻撃指令』(翻訳、イーストプレス)の2冊を出しました。一昨年も1冊出しているのですが、出版不況下では珍しいと言われています。今年はまだ少しロマンチックなものを手がける予定です。

もともと私は女子大で英文学を教えるのが念願でした。女子大は駄目でしたが、東洋大学の英文学演習を(『英文学の背景』)担当しましたから、まあ満足しています。今度の本はその延長上に位置します。

また去年は11回海外に旅行しまし

た。主たる目的は第二次大戦中の日系人に関する調査ですが、この方はどうもはかどりません。

あけましておめでと〜う〜い

ます 大原 誠

私事、今年は古巣のNHKで仕事をします。金曜時代劇『御宿かわせみ第三章』の演出です。放送は五月中旬から。ご期待ください。長男は、TBS日曜日「サンデージャポン」の報道ジャーナリストとして画面出演、次男は金曜時代劇『柳生十兵衛』のセカンド演出です。放送は四月初旬から。親子同じ土俵にたちます。

個人が大事

岡村黎明

ラジオ・テレビ、それらをひっくり返して放送については、これまで「組織で表現する」、組織が切っても切れないものと考えられてきました。それはそれで確かなのですが、このごろ、人間の表現なのだから、人間、あるいは個人が基本にある、とあらためて気がつきました。

日本では、放送といえば、放送局、放送会社、放送協会…を思い浮かべてしましますが、その前に、番組をつく

り、企画し、編成している人間が重要です。P、D、カメラ、照明さん、技術さん…、そういえば制作現場では個人の姿も見えないかな？報道や記者はどうか。見えていない？昨今のNHKや民放の不祥事に思うこと。放送人の会が重要ですね。

A Happy New Year

荻野慶人

謹賀新年や頌春ではなく、横文字で六十年前のときめきを呼び戻したい元旦であった。会報に相応しく縦書きに直して年賀の詞としたい。

”You are My Sunshine”

妻の兄は一九三二年生まれの僕より一歳上で、敗戦直後の中学時代は手作りのハワイアンギターで、この曲を演奏するダンディーな青年だったという。

”我的陽光”

二十年前（一九八五）の夏、上海・和平飯店のダンスホールでは、戦前を偲ばせる年配のジャズバンドが、この曲で民主化の新風を謳っていた。畏まって踊る白いシャツの若い男女が、日本の戦後を想い出させた。

昨夏、義兄は昇天し、またまた一人の「戦争を知っている大人」が逝った。義兄への服喪は三カ月と聞くので、ボクは賀状で世界の平和を祈らせ

て頂く。

「鼓の家」

各務 孝

正月明けのNスベ「鼓の家」（相田洋作品）には近來にない感銘を受けた。これは、相田の初期作品「親子鼓」（1966）を土台にして、伝統芸能の技と精神の継承が当時から38年経た今日どのように受け継がれて来ているかを、ある「鼓の家」一家の肖像を通して描いたドキュメンタリーである。この作品が凡百の芸能一筋物のルポと異にするのは何と言っても、38年の歳月の重さである。

「親子鼓」と現在の一家の在りようを重ね合わせることに、芸の伝承の厳しさ、奥の深さを見る者聞く者に如実に感じさせる。

相田は1968年から日本人の南米移住の記録を撮りはじめ、節目の年毎に、現地を訪れその生活をフォローし続けて来たが、今回の「鼓の家」はその古典芸能版とも言えよう。新年に当たって今更のように「継続は力なり」の言葉を噛み締める次第である。

”血液型”番組

加藤滋紀

BPOの「放送と青少年に関する委

員会」が先日、「血液型と性格」を扱う番組について、注意を喚起する「要望」を出したことは、まことに適切だったと思います。早速、私の担当しているゼミでこの問題を提起しましたが、学生は「血液型をテーマにしたバラエティー番組はとも面白い」「何が問題なのですか？」とピンとこない様子でした。ひよつとすると、放送現場の若いスタッフも同じように反応しているのではないかと気になりました。「テレビが若者を毒している」と言われないよう放送局の自浄努力に期待するとともに、子供や若者にメディアリテラシーがとて大事な時代になつていくことを痛感するこの頃です。

亀岡市制五〇周年

北川泰三

2005年「平和都市宣言」の亀岡市が「市制五〇周年」を迎えた。それを記念して大晦日に、亀岡在住の大学生が市に呼びかけて、戦争と自然災害の悲劇を悼み、新年の世界平和を祈願するカウントダウンイベントを開催した。会場のガレリア亀岡ホールには幅二メートルの翼を持つ「巨大折鶴」が市民と学生の手で制作され、フォーク歌手高石ともや、シンガーソングライター奥井亜紀、栗山市長他知名人多数が駆けつけて、市民と共に「平和の

歌」大合唱が繰り広げられた。この模様は、地元KBS京都放送の「年末報道大特集」で中継され、世界の平和と幸せを祈る市民と学生の声は一つになつて夜空いつばいに広がっていった。

筆者の京都学園大学生が実現した企画「Peace Feast Kameoka 2005」で今年
は明けた。

謹賀新年

齊藤守慶

ラジオ放送開始八十周年を迎え、放送の公共性と文化としての重要性に改めて思いを致し、放送番組センターの事業充実に努めて参ります。皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

終戦60周年

酒井 昭

今年終戦60周年、あの暑い夏の日の八月十五日から幾星霜、紆余曲折を経ながら、よく今日まで生活できたものだと思つています。外にイラクへの自衛隊派遣延長問題、北朝鮮の拉致被害者問題、内に郵政民営化、三位一体など難問山積のうちに新年を迎え、先行き不安感を抱きながらも、自分なりに身の処し方を考え、新しい展望をもつて暮らしたいと思つており

ます。

地球丸」とシミュレーター

寒河江正

この所、放送界は「占い」がゴールデンタイムを席巻している。

世の中全体が不透明、先行きがわからない不安な時代。こんな時、大衆は「占い」に行動の拠り所を見出そうとしているのかも知れない。テロ、戦争が日常化している。凶悪な犯罪、モラルを欠いた官民の止まらない不祥事。地震、台風、津波による自然の猛威。このような現象は今や一国を越えて地球規模にまで拡がっている。

今世紀の末には80億もの人口が予測される地球。この地球を丸ごとシミュレートするセンターが我が横浜にある。1秒間に何と40兆回の計算能力をもつスーパーコンピュータがご自慢だ。更に現代の複雑社会を解析し読み解くには、部分だけの解明ではなく日本の思想の根源にも通じる全体を展望する能力が関わる。気象はもとより、医療、車、通信、食料、と暮らしのあらゆる分野に威力を発揮するシミュレーター。『地球シミュレーターは日本が世界に誇る文化です』。センター長で、2003年に21世紀の偉業賞を受けた佐藤哲也氏は新春の私の番組で胸を張った。

迎春

坂本良江

昨年はNHK『課外授業 ようこそ先輩』のプロデュース、シニアードハウス「松陰コモンズ」の暮らしと運営に携わってきました。今年には次のステップ、念願の多世代コレクティブハウスでの暮らしを始めます。初めての下町暮らしも楽しみたいと思います。「女は家庭へ」の逆戻りはできません。憲法9条と24条を守るために力をつくしたいと思っております。いい年にしましょう。

ヤスパース

重延 浩

カール・ヤスパースの「哲学的自伝」を読みました。「理性の自己拡張は、生物として生きる限界の制限を受けません。さまざまな精神的経験に基づいて、新しい広がり目が開かれる、という年齢とはちがはぐな気分になるのも、いっこうに不思議は無いものです」

偶感

鈴木典之

古稀祝いの中学同窓会に帰郷してみ

て、若い方の違いに驚いた。見た目の落差が激しいのだ。恵まれ組の出席者ですらこうなのに、と、欠席者が思いやられた。

今流行りの「年齢七掛け」説に勇気づけられて、還暦過ぎも四十代のつもりでやってきたが、七十歳を迎えて「壁」の気配を感じはじめています。貯えがなくなつた心細さに、徒手空拳の無力感も加わつて、このところ言動にも歯切れの悪さを自覚するのだ。

戦中からの、国の来し方を体験する「古稀世代」が、社会に向かつてもつと声を出さなければという思いがあつて、その一点で「現役」を任じているのに、この逡巡こそが「古い」というものか。

向上する権利

武谷雅博

昨今のテレビには良い番組があまりにも減つてしまった。そしてCSまで加わつた放送メディアの中で、いわゆる「放送」はそのone of themとなつて、これではその存在理由すら危なくなつていく。私は、国民には「知る権利」と同時に「向上する権利」があると思つている。向上の「上」とは何かには、良い番組の定義と同じく議論はあるが、何が上のほうかということ

を人は十分感じ取ることができ。いま視聴者を引きつけるものは、この「向上する権利」に応える番組ではあるまいか？「感動した」「ああ生きて見たい」「心が洗われた」というようなことが人に訴えるのは、目先の視聴率ではなくとも、深くて心強いものがあるだろう。「良い話」には記者発表がない。自分の足で探し当てるよりほかにはない。だからこそ、この視聴者の潜在要望に応え得るのが従来放送ではないのか？「放送人の会」は、こうした動き出しに何らかの力が出せなければ、それこそ存在の意義が疑問になる。

初体験三つ

田澤正稔

還暦の年、初体験が三つあった。一つは清川CC16番ホール121ヤード9アイアンでのホールインワン。白球が銀色の雨を纏ったグリーンを切り裂いてホールに吸い込まれた瞬間、ぼくは「奇跡というの是在る」と信ずる側の人間に変身した。二つ目は入院、そして臓器摘出手術。結果的にはオーバーホール。諸々の数値がご破算で願っています、となつて新生気分を味わっている。しかしそれにしても、ひとの生死を分かつものは何か？振り返るとまっくらな虚無

が覗けた。

退院して自宅で静養と洒落込んでいたとき社長からいまの仕事の内示されたのが三つ目。こちらは、この歳になつての新しい仕事に心機一転、精進の日々。

暦選つてまた次々と初めてのことに際会し、ときめいたり、鳥肌立ったり、紙一重の差が生む感情の裏表を楽しんでいる。(併TBS監査役)

近詠四句

鶴橋康夫

清流に一期一会の半夏生
春疾風出口を探す我に似て
「あなたと共に闘えて光栄でした」
野沢尚の『碧なき者』を慈しんでいた
だいてありがとうございます。そのDVDが出ています。池端俊作が日常の
激性を二時間ドラマにしてくれました。
『ぶるうかなりや』、正月早々、ス
クリーン対応型カメラで撮影です。女
探偵役の宮沢りえさんが活躍します。
柄本明、渡辺えり子、柏原崇、井川遥
さんを常連のキャストが囲みます。
青い空ポーンと浮雲冬の空
したたかに野良猫路地裏春の雨
華眼、肥満を気にしなければまずまず
の毎日です。
よい年でありますように。

江戸時代のテレビ

中澤忠正

先日、酒席の座興が俳句の話になり、芭蕉は音楽的、蕪村は絵画的ということで見解が一致。そこまでは常識の域を出ませんが、絵画的とはいえ蕪村の「春風馬堤曲」は、テレビの台本そのものだね、という新説が出て盛り上がりました。NHKに、小さな旅とかいう番組があるじゃないか、あれなんかピタタンコ、と。ゆつたり長い移動撮影なんかやってみたいなあ、というわけです。すると、じゃあ一茶はどうなんだ、という展開になり、これは「小咄」ということで一同納得。と、なにか江戸俳句の三巨匠が揃えばテレビの世界は完結だね、と決まって、めでたくお開き。

年頭所感

長沼士朗

紅白歌合戦の視聴率40%割れについて、民放の関係者の談話を新聞で読む。いわく、「紅白は怖くなくなつた」、「生放送が魅力を発揮するのは勝負の世界。やはり格闘技やスポーツということになるだろう」。別に紅白でないと絶対にいけないとは言わない

が、「大みそかは格闘技」というのは、視聴率さえ良ければ何でもよいという体質がちつとも変わっていないことが感じられて、淋しい。

正月の箱根駅伝中継は好きな番組の一つだが、たすき渡しやゴールの時の相も変らぬワンパターン、絶叫型の実況アナウンスには興をそがれる。小学生の国際学力比較で、日本の子供の読解力が極端に低下しているということだが、こうしたことも、熱い状況をクールに伝えることが出来なくなつてしまった現在のテレビの状況と無関係ではないような気がする。あくあ、テレビ・ルネッサンスが起きて欲しいなあ。

初句会

西川 章

東(ひんがし)はいま茜空年明くる
読みはじむ田辺聖子の一茶伝
老優の進退みごと初芝居
路地の店膝寄せ合つて初句会

阿舟

マイナス・プラス

原田庸之助

昨年暮れ私は八二歳になりました。行きつけの酒場の常連達が誕生日の祝

いをやるといので出かけました。祝盃のあとでなにか一言、そこでしゃべったことの要旨を記します。年齢の八十という数字はとても重い、それに比べ一とか二は全く軽い。八十一が八十二になつても大したことはない。「お年齢は？」と聞かれたら「マイナス八」と答えます。私の感覚では九十歳が基準です。九十歳がプラス・マイナス〇、だから私はマイナス八です。〇で終るわけではありません。その後はプラス一、プラス二と続きます。暮れに市川崑さんからハガキが来ました。喪中につき……という例のハガキです。崑さんは八十九歳だと思いますが、奥さんは早く亡くなり、お子さんはないと思ひながら読みますと、姉上が百三歳で亡くなられたそうです。プラス十三です。人間は生まれるとマイナス九十からスタートします。私はやつとマイナス八までたどり着いたわけです。松尾羊一さんが多分マイナス十五、松前洋一君がマイナス十九かな。いずれにしてもまだまだ先は永いです。

度と言われています。一ラウンドにシヨートホールは四ホールありますので、五〇〇〇Rして計二万回シヨートすることになります。私が廻つたR数は、平均して一年五〇Rとして、四十年で二〇〇〇Rしたことになります。シヨートHの打数は八〇〇〇回で、平均より良いことになりませんが、生涯二〇〇〇R以上の人はそんなに多くないと思います。同じ位のキャリアの友人で三〜四回ホールインワンをしている人が四・五人いますし、私がホールインワンを目標した回数も一〇回位（前後の組を含めて）になります。

日本はシヨートホールは易しい（フロックでカップインすることも多い）ので、五〇〇〇〜八〇〇〇回に一度位の確率でホールインワンが出るのではないのでしょうか。ホールインワン保険の会社のデータはどうなっているのか知りたいものです。

動きが沸き起こっているのです。1959年の「見舞金契約」、1995年の「政治的決着」と、これまでの水俣病問題は、2度幕引きの動きがありました。ところが、根本的には何にも解決していなかったのです。単なる食中毒事件が、何故ここまで複雑化し、長期化したのか。取材すればするほど見えてくるのは、巨大な歯車に巻き込まれた人々の苦悩です。いったいその歯車は誰が作ったのか、今年水俣病が公式に確認されて49年、その疑問を解く大きな手がかりを得る年になりそうです。

寒中見舞い

村木良彦

寒中お見舞い申し上げます。服喪中のため賀状は失礼しました。新年そうそう「地方の時代」映像祭の準備に入っています。

水俣病の今年

村上雅通

昨春秋、水俣病を拡大させた責任が国、熊本県にあることを最高裁が認めて以降、新たな動きが出ています。これまで息をひそめてきた人たちが、行政に対して患者に認定するよう求める

バカ・バカ・チンドン

山縣昭彦

☆旧秋十月、芸術祭作品取材のため滞在中の、北海道知床の宿。某夜担当デイレクター突然部屋に来て、いきなり床にひれ伏す。文化庁への参加手続きを1ヶ月余放置し、本年度の参加はすでに失効せりと。バカなり。その後放送会社からも連絡一切無し。バカ、バカ、バカ、大バカなり。

☆同月、もう一本の参加作品『チンドン降臨』神話の里 高千穂からの報告』完成、放送。結果は優秀賞。併せてアジア太平洋放送連合のABU最優秀作品賞を受賞。湯浅和憲（宮崎放送・放送人の会会員）のプロデュース。主人公のおばあさん7人は平均年齢77歳の素人チンドン屋。朗報にどつと沸き、ついでには私のとく知るバリ島でガムラン楽団と競演したいと。やつたるでえと即承知の私もバカなり。☆歳末にかけてバリ島で休養。ほとんど病臥の態。田舎のリゾートホテルでホテルスタッフの熱きホスピタリティに感動する。脈絡も無く、これはどうしてもこの島へチンドン連中を案内せにやならんと。6月実現の運び。☆このほか新年の予定何も無し。仕事の全てを終えてサバサバ。軽量生活第一歩なり。初めてカミサンと二人きりの正月。（茨城県鹿嶋市武井在住）

ホール・イン・ワン考

松本 明

昨年五月、ゴルフを始めてから四年、やつとホールインワンを達成しました。ホールインワンの確率は二万回に一

60年安保の頃の夢

山田 尚

チェ・ゲバラの「モーターサイクルダイアリーズ」が、小さな劇場だがロングランしている。ゲバラに興味を持って若者も多いのか、と思ったら、主演のメキシコ俳優、ガエル・ガルシア・ベルナルの人気もあるらしい。が、書店の棚に関連書籍も甦った。中沢新一氏が「ぼくの叔父さん網野善彦」の中で、60年安保の頃の最後ともいえる直接行動について触れていたが、そう言えば、あの頃まで世の中は夢を求めヴィヴィッドだった。

近況

大和定次

昨年の夏、NHK国際放送夏期特集『原爆の木は語る』に作成参加しました。原爆で被爆した「被爆樹」を研究している被爆二世の大学生が主人公です。人間と自然の共生の重要性を説き、生命の尊さと核の廃絶を訴えるものです。放送後、世界各国から多くの称賛の便りが届きました。

01年「音作り半世紀」ラジオ・テレビの音響効果（春秋社）、03年「ザ・音職人」CD（キングレコード）を出しました。放送文化を支えてきて、現代にも継承されている基本的な音響効果のことが分かってもらえたようです。特に若い人達のリアクションが多くありました。

地域から国境を越える

横山英治

大阪・生野の仲間と作り、秋、イタリア・ミラノまで持ち込んだ自転車でローマもパリも自転車で行きました。また夏、生野の仲間と民放の仲間が力を合わせ、大阪府立住吉工業高校を舞台に、子どもたちとラジオの組み立て大会を開きました。

自転車、半田ごて、ペン、仲間と子どもがいれば、大阪の未来はきっと見える、と叫んでいるとやたらに自転車ばかり増え、置き場所に困るようになります。まだまだ走ります。今年もよろしくお願いいたします。

放送各界からの年賀状

NHK放送文化研究所

千葉邦彦

一月一日、放送博物館では「放送80年展示」をオープンしました。一月五日には「文研メールマガジン」（イントラ）を創刊します。今年も「デジタルテレビ新時代の確かな軸」としての愛宕山を充実させてまいります。ご指導の程よろしくお願いいたします。

『GALAC』編集長

小田桐 誠

景気は着実に回復しているといっても雇用の改善や所得増につながらず、憲法や教育基本法改正が具体的スケジュールにのぼり、メディア規制が一層進み、良心の自由が踏みにじられる状態が続いています。公金イコール自分の金という官僚の姿勢も目に余りません。停滞感、閉塞感が強まる一方で、喜怒哀楽メリハリのある日々を送るためにはまず健康であることが大切と実感しているところです。

昨年は放送批評懇談会発行の『GALAC』編集長に就任するなど、大きな変化があった年でした。また十二月には文春新書『テレビのからくり』を刊行しました。ご笑覧のほどを。今年

もボチボチ、しかしここぞという時はきつちりと、さまざまなことに取り組むつもりです。

『月刊民放』編集部

堀木卓也

昨年は原稿執筆、座談会、インタビューなどで多大なご協力をいただきました。締め切りまで余裕がない中で執筆を受けていただいたことも、しばしばでした。時機を捉え、バラエティーに富んだ特集や誌面を組めたのは、ひとえに皆様のおかげです。ありがとうございます。中越地震の座談会を載せた弊誌一月号が出た直後、スマトラ島沖の大地震が起きました。どうして十八万余の人々が亡くならなければいけないのか、メディアの役割を考えずにはいられません。二〇〇五年が皆様にとって、世界にとって佳き年になりますように。本年もよろしくお願い致します。

この他、東京こだまの会・渡辺文代さん、FMリバーの社長柳沢紀夫さん、民族文化映像研究所・姫田忠義さん、の皆さんからも丁寧な年賀状を戴きました。ありがとうございます。

第10回 名作の舞台裏

第10回 名作の舞台裏

『蔵』（NHK 95年放送全6回）

今回は放送ライブラリー主催の「ドラマでたどる宮尾登美子の世界」展にリンクするかたちで、評価の高かった連続ドラマ『蔵』を取り上げ、最終回を上映、華やかなゲストを中心にロケの裏話を中心の座談会は大いに盛り上がった。

司会 石橋 冠

ゲスト 檀ふみ（佐穂役）

松たか子（烈役）

大山勝美（演出）

04・12月・19日（於・情文ホール）

「おとつあま、あの蔵を全部、烈にくんなせ。烈がお酒造りしてみせるわね」

新潟の山あいの酒造家に生まれた盲目の女性 烈の半生を、原作のもつ新鴻言葉の文体や挿絵（智内兄助 毎日新聞連載）のイメージを強烈に意識して成功した作品だった。

デビュー間もない松たか子さんにとつては魅力ある、しかし難役である。晴眼の者が闇をどう感じて生きているのか。彼女は演技の深みを求めて横浜にある盲学校にかよう。教室で盲目の生徒のひとりがさりげなく言った。

「NHKのドラマなのね。見るよ、見るよ」。目の見えない少女はいつもテレビを「見る」のさう。この言



葉に感動したという。テレビは「心眼」で見ることが出来る。「心眼」に応える演技、それを求め続けたドラマだったという。

また、檀ふみさんは「つつましさ」と激しさを秘め、思いを内にして凍として生きる佐穂、地方の素封家にみる日本女性の原型をみた思っていた」と語る。二人の女優が挑戦するに価いするドラマであった。



話題は古い酒造家の蔵をさがすロケハンの内輪話や撮影の苦労話などに入り、会場にいた久野浩平氏（同じ原作者の『権』をドラマ化演出 75年）が原作の周辺を補足し、同席した美術や照明のスタッフも交え、このドラマの陰影をどうとらえるか、話題は佳境にはいる。客席はドラマを知る上質はファンで超満員の盛況ぶり。定員をはるかに越える応募状況だった由。

放送人噂の親相

◆ 『中村敦夫新聞』無念の休刊！

「12月号をもちまして休刊させていただきます。ただのことになりました。」



政界引退を表明し、私は大きな人生の転機に直面しました。今後どう進むかについては未定ですが、何か新しいことを始める場合には、みなさまに必ず御連絡いたします。その節は、再び御支援をよろしくお願い申し上げます」

（解）敦夫さんの国会活動や映画、テレビの「俳優人生」や神保哲生氏、半澤健市氏らサポーターたちの寄稿によるユニークな新聞でした。すでにテレビ復帰が伝えられ、テレ東恒例長尺ドラマ『国盗賊物語』では武田信玄役で出演。「紋次郎」氏の復活を拍手、応援したいものです。

◆ 佐々木昭一郎氏、オヤジ狩り禍

「極刑にすべし！」と大激怒ッ

「十一月十六日、午後10時50分ごろ、大和市近辺に住む16歳と17歳の県立高校生徒ら6人を強盗の疑いで緊急逮捕した。6人は同級生でいわゆるおやじ狩りと称し、金欲しさにやったという。調べでは大和市下鶴間一丁目の市道で自転車に乗って帰宅中の大学職員

（68歳 注・佐々木氏のこと）を停止させ、「金をだせ」と脅し、自転車の籠から紙袋を奪った疑い。少年らはその場から逃げたが、近くにたむろしているところをパトロール中の署員に職務質問され、犯行を認めたとすう」

（朝日新聞神奈川県版11/18付）

◆ 『岡本愛彦さんを偲ぶ会』

知人たちによる集まり

暮れもおしつまった12月27日、青山荘で、ささやかな、しかし凛とした集まりがあった。高橋一郎、真船楨、村木良彦ら、生前の岡本さんと親交があった人々の肝入りで開かれた。NHK時代から知る川口幹夫さん、澤田隆治さん、大山勝美さん、荻野慶人さん、久野浩平さんなどの思い出話が続き、

『私は貝になりたい』以後、氏の時代に抗した峻烈な身の処し方など、さまざまなエピソードにつつまれた。その意味では村木良彦氏の「テレビ界の巨星が消えた」（「総合ジャーナリズム研究」191号）を読まれたい。（M）

「放送人の証言」

レポート⑨ 久野浩平

前回、紙数が溢れカットせざるを得なかつた遠藤利男さんの「証言」の紹介から始めます。

遠藤さんは一九五四年NHK入局、BKに配属されラジオドラマ制作者として渋谷天外、エンタツ、アチャコさんたちと仕事をしました。五九年AKに異動、「放送詩集」を担当して詩と音楽と効果音のモンタージュによる詩劇的表現が目立ちます。六一年CKに転じると共にテレビドラマに進出、ここでも詩劇や「オッペケペ」「汽車は夜九時に着く」など実験的な野心作が中心になります。六五年AKに戻ってからはドラマ部のディレクター、プロデューサーとしてNHKドラマの華やかな時代を演出しました。

「表現の様式もテーマも拡げて行く」というアレです。で、そういう多様な中から、ま、クリエイティブイテイーを見つけて行きたい。で、ぼく、これはもうひとつやろうとして出来なかつたことなんです。ええ、ベケットの「ゴドーを待ちながら」を中継でやろうと企画して、それで一人は藤山寛美、もう一人は誰がいいかなと

思つて、ま、有島一郎。二人でどこでやるかという、ま、オリンピックのプール広場、または渋谷のハチ公のこ(中略)で、いろいろ話を詰めていううちに藤山寛美がだんだんこわくなつてきて、やつぱりアカン、降りると言い出した」

テレビディレクターたちの「証言」はまだ続きます。

真船禎さんは五六年、開局一年のTBSテレビ(当時ラジオ東京)に入社、播磨期テレビ制作現場の熱気の中でドラマ演出家としてスタートします。「日真名氏飛び出す」、シリーズ「お母さん」、早坂暁さんとの仕事など面白い話題が続出するのですが、真船さんの「証言」で大きな比重を持つのは岡本愛彦さんとの出逢いです。スタツプとして参加した「私は貝になりたい」「いろはにほへと」の思い出のあと、真船さんは六二年NHK青山荘で開かれた集会について触れます。岡本さんの発案で井上博、和田勉、岡本太郎、森川時久、大山勝美さんたち百人近い各局のテレビ演出家が大集合したのです。演出家は企業に属すべきでない、ユニオンを作ろうという夢があったそうです。翌年岡本さんはTBSを退社、一年後真船さんも合流してフリー演出家の道を選びます。それは苦難の道でしたが、一方で多様なジャン

ルの作品に挑戦する可能性が開けました。「赤い殺意」「島」などの連続テレビフィルム、「素晴らしい世界旅行」のようなドキュメンタリー、特撮の「ウルトラマン」シリーズなどです。今も現役の演出活動が続ける真船さんの「証言」から一言。「一番最初のフリーの演出家は昭和三九年、それから何年たちましたかね。四〇年かかっているんだよね。やつぱり。だから永い話ですよ。でもなるものはなるのだから、やつぱりテーマは確かだったんだね」

次は萩野慶人さんの「証言」です。萩野さんは宝塚映画を経て五八年開局早々の大阪YTVに入社。六〇年の連続ドラマ「大阪野郎」以来ヴァイタリテイー溢れる「大阪もの」を作り続けることになりました。「銭(ぜに)」「けつたいな奴」「ぼてじやこ物語」「C調紳士録」等々、中村扇雀、ミヤコ蝶々、南都雄二、天王寺虎之助さんたちの出演者、作家としては藤本義一、花登筐、土井行夫、茂木草介さんたち。萩野さんの「証言」は当時の大阪テレビ界の活気を生々しく思い出させます。出身が示す通り萩野さんは映画青年でした。映画に劣らぬ映像をテレビドラマに求め、そのためリアリズムに徹しました。

つとトラックでね、借りて来てね、だあつとセットに置いたんですよ。そして廊下で臭い臭いって、みんな社員が言い出しましてね、これも叱られましたね。(中略)とにかくリアルに再現することばかり考えてたなあ」

嶋田親一さんは演劇少年を自称します。大学を中退して新国劇に参加。やがて五四年開局直前のニッポン放送に入社、この時期クイズ番組の公開録画を大量にこなしたのがその後芸能人たちの人脈につながります。五七年フジテレビが開局してからはドラマのディレクターとして数多くの作品を演出しました。

「結局、その、ぼくは新国劇だから、どうしても、その映像的にいうと、やつぱり映画とテレビというより舞台とテレビという感じ。映像作りがスタジオドラマの基本となる時代にやれたんでよかったですね。だからカットをあまり細かく割らないで芝居でもってやるとい、ま、グループショットは難しいが、アップを撮るのは簡単だよって言って、(岡田)太郎とね、ケンカしたりなんかしてた」

しかし、嶋田さんの「証言」の真骨頂はプロデューサーとしての活動にあります。編成部の副部長でありながら、フジテレビが合併した新国劇の社長を勤めたり、制作部門の分社化で新

制作プロダクションを立ち上げたり、NHKの「勝海舟」事件後北海道に去った倉本聡さんのために話題作「六羽のかもめ」を書く場を作ったり、その行動力は驚きです。嶋田さんの「証言」は、人と人の出会いの不思議さ、稀有の交遊録です。

最後は北代博さんの「証言」です。北代さんは五四年ラジオ東京に入社、翌年のテレビ開局に当たり希望してテレビ演出部に移ります。五六年ごろから「宇宙物語」「キンピラ先生青春日記」「アイラブ亭主」などの話題作を作りますが、五八年暮開局直前のNET(現テレビ朝日)に移り、北代さんは数少ない現場経験者として前衛的実験劇から新派風な作品まで幅広く活躍することになります。「署長日記」「短い短い物語」「女の四季」芸術祭参加作品「岐路」など数々の作品があります。北代さんの「証言」の中心はどうしても六六年の伝説的人気番組「氷点」になります。「氷点」については企画制作の経緯、裏話など数多く語られています。ここではその後日談のエピソードを紹介して終わります。

「放送終ってからね、(ADの)田中利一がね、キタさんのニセ者が現れたと言っんですよ。でね、下北沢の飲み屋でね、利一がそこ行っったようなん

だけど、そこにね、『北代博、プロデューサーの北代だけどもね』と言っただけ、そのママの娘さんをテレビに出してやると言ったの。キタさん、これ、行っつて今のうちに何とかしたほうがいいよって言うから、こっちも慌ててね。(中略)そしたら、『あ、やっぱり』とこのママが言うんですよ。ね。(中略)いや、これにはね。後にも先にも、ニセ者が現れて、ま、そういうオマケまでつきました」

*
「放送人の証言」の一部抜粋がTBSの「新・調査情報」(2005.1.2月号)から三回にわたり特集されることになりました。第一回は和田勉さん、石井ふく子さん、岡本愛彦さんの「証言」です。読み物として充分面白いものです。是非二読ください。

新会員紹介

- 中崎清栄 (北陸放送 制作報道部 ディレクター)
- 橋本 潔 (美術進行・デザイン)
- 村上憲男 (IBC岩手放送 報道制作局長)
- 石井 彰 (作家・ラジオ評論)

鵜沼海岸から⑮

放送は産業か

川口幹夫

いろんな悲しみや苦しみを含んで多難な二〇〇四年は流れて行った。

明ければ二〇〇五年、カラリと晴れた正月である。鵜沼海岸からは遥か西の方に雪をいただいた富士が見える。ことしの三ヶ日はまことにきれいに富士が見えた。きつといい年になるだろう…。

私の故郷ともいうべきNHKが揺れている。激しく厳しく視聴者の非難を浴びている。

NHKよ健全に生まれ変わってくれ。そんな願いをこめて、この文を書いている。

放送が時代の変遷とともに変わってきていることは事実だ。それも新技術の発明発展と歩調を合わせるように…。近頃のデジタル化などは正にその代表である。

そしてその反対に大産業と化してゆく放送は、初期に持っていた知的開明と教育的進化をおきざりにしてしまっただ。

少しでも多くの人々に見てもらおう

という気持ちには、視聴率唯一絶対視を招いてしまった。

少しでも多くの人々に見てもらおうという思考は、番組の低劣化を招いてしまった。

そして今、何という同一趣向の番組が多いことか！それは機械工業の進み方と全く同じに思える。使い易い、見た目のいい道具が出来る、一斉にそのほうこうに向かつてすべての機械が走り始める。

個性化ということは合理化に反することだから、なるべく個人的でないようにする。便利になる、安価になる、それだけを目指して業界は走ってゆく。

機械産業はまあそれでもよい。たしかに、便利で安いことは大きな目安のだから…。

だがわれわれが仕事としている放送という産業も又、同じでいいのだろうか？

そんな筈はない。放送という産業は、機械にのせてたくさんの人に送る「番組」というソフトを作っている産業なのだから…。

人の真似をしない、アツという発見をして見せる、人間の理想を追う、そんな番組を作ろうよ。

会員名簿 05・1・21現在

- (あ) 合川明 青木裕子 赤井朱美
 秋田完 新井和子 有馬哲夫 (い)
 石井清司 石井ふく子 石井彰
 石高健次 石橋冠 磯野恭子
 磯村健二 市岡康子 一色伸夫
 伊藤雅浩 井上欣也 井上良介
 岩澤敏 岩下恒夫 (う) 上田千秋
 碓井広義 歌田勝彦 宇野昭
 生方恵一 浦田彰 (え) 江口展之
 遠藤利男 遠藤ふき子
 (お) 大蔵雄之助 太田敬雄
 大原誠 大原れいこ 大山勝美
 大類 啓 岡弘道 岡崎栄
 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明
 小川秀夫 沖野暁 荻野慶人
 小田昭太郎 (か) 加賀美幸子
 各務孝 片岡敬司 片島紀男
 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫
 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀
 加納孝夫 上安平冽子 嶋下信一
 河合肇 川口和久 川口健一
 川口幹夫 河崎 勲 川竹和夫
 川平朝清 河邑厚徳 河村正一
 (き) 岸田 功 北川泰三 北川信
 北出晃 北村美憲 北村充史
 木村栄文 木村成忠 木元教子
 (く) 楠美昌 工藤英博 国枝忠
- (こ) 小出五郎 児玉久男
 児玉孝光 後藤多聞 近藤晋
 今野勉 (さ) 斉藤伸久 斉藤守慶
 斉藤秀夫 斉明寺以玖子 酒井 昭
 寒河江正 坂元良江 桜井均
 桜井元雄 迫田朋子 笹川紀久雄
 佐々木欽三 佐々木彰 佐藤年
 佐藤利明 沢口真生 澤田隆治
 沢田隆三 (し) 重延浩 静永純一
 渋谷康生 島地純 島野功緒
 清水 満 下川靖夫 下重暁子
 習田豊 城 菊子 (す) 菅野高至
 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典
 鈴木道明 鈴木紀郎 鈴木典之
 須磨 章 せんぼんよしこ
 (そ) 曾根英二 (た) 高尾正克
 高島秀之 高橋一郎 高橋啓
 高橋 泰 滝大作 武田光弘
 武谷雅博 田澤正稔 只野 哲
 田中昭男 田原英二 田原茂行
 (ち) 千葉勉 (つ) 露木茂
 鶴橋康夫 (と) 土居原作郎
 戸崎春雄 戸田桂太 外崎宏司
 土門正夫 (な) 中川幸美 中崎清栄
 中澤忠正 中島 僚 中田美知子
 中谷英世 中津川輝夫 長沼士朗
 長野克亮 中村敦夫 中村克史
 中村季恵 中村耕治 中村美美子
 永守良孝 難波秀哉 (に) 西川 章
- 新村もとを 西ヶ谷秀夫 丹羽美之
 (ね) 根津武夫 (の) 野崎茂
 野田宏一郎 信井文夫
 (は) 萩野靖乃 橋口義春 橋本潔
 林勝彦 林健嗣 林裕史 原由美子
 原田庸之助 (ひ) 備前島文夫
 久野浩平 一杉丈夫 (ふ) 深町幸男
 福田雅子 藤井潔 藤井チズ子
 藤代勝博 藤田晋也 藤久ミネ
 (ほ) 星田良子 堀川とんこう
 (ま) 松浦幸一 松尾羊一
 松田輝雄 松平定知 松前洋一
 松本明 松本修 松本国昭 (み)
 三上義智 三国 章 水上毅
 水野憲一 満島保夫 三村景一
 三村千鶴 宮川鑛一 宮脇敏雄
 明神正 (む) 村上紘一 村上憲男
 村上雅通 村上佑二 村木良彦
 (め) 銘苅栄昌 (も) 桃井 章
 森川時久 諸橋毅一 (や) 矢島良彰
 藪内広之 山泉昭彦 山崎隆保
 山崎 裕 山路家子 山田良明
 山田 尚 大和定次 山名光紀
 山根基世 山辺麻未 山本恵三
 (ゆ) 湯浅和憲 (よ) 横沢 彪
 横山英治 吉永春子 吉村直樹
 吉村誠 (わ) 和田智允 和田光弘
 和田洋一

☆ お知らせ
 第7回 放送人の世界

赤井 朱美 人と作品

日時 2月5日(土) 13:30、17:00
 2月12日(土) "

於・放送ライブラリー会議室
 (横浜情報文化センター 10F)

・上映作品5日 「奥能登 女たちの海」

12日 「ここに家族あり」

「能登の海」

報告 赤井朱美

司会・聞き手 今野 勉

リリズムとリアリズムが交錯する
 文体をもったドキュメンタリト

赤井朱美氏の世界を楽しみましょう

編集後記

まずは恒例のお詫びです。

前回は正しくは21号でした。新春年
 賀特集の本号はしたがって22号です。

05年の会報は、皆様の投稿原稿や連載
 物を優先して編集したいと思えます。

お気軽に、または「俺にも言わせろ！」
 どしどし御寄稿ください。FAXなら
 3221-0019宛てです。

本年もよろしく御鞭撻ください。

会報 編集部

松尾羊一

伊藤雅浩

鈴木典之

磯村健二

田澤正稔

◆事務局詰め当番 月(北村充史)
 水(野崎茂)、金(伊藤雅浩)です。